様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００１２４

研究課題名（和文）東アジアの事例に基づくサウンド・アート研究の基盤の確立

研究課題名（英文）Establishment of a foundation for sound art research based on East Asian examples

研究代表者
中川　克志（NAKAGAWA, KATSUSHI）

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授

研究者番号：２０４６４２０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは　A.台湾におけるサウンド・アートの概要を解明すること、B.日本におけるサウンド・アートに関する事例研究を蓄積すること、またその概要を記述すること、C.欧米におけるサウンド・アートに関する個別事例研究を行うこと、そして、D.これらの研究成果を総合して間アジア的パースペクティヴを見出すこと、が目的だった。しかし世界的なコロナ禍の影響で、海外調査を必要とするAとCはあまり進捗させられなかったが、Bは集中的に研究を進捗させ、また、これまでの蓄積に基づきDを推進させることができた。単著『サウンド・アートとは何か』の刊行は、今後の更なる事例研究と国際的な比較総合研究の基盤となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
サウンド・アートなる名称で参照される対象の特徴は、音楽、視覚美術、メディア・アート等々の様々なディシプリンで、実質的な対象や歴史や特質について別様に理解されることである。また、欧米日において、少しずつ異なるニュアンスを維持しながら別様に理解されることである。本研究は、それぞれのニュアンスの違いを系譜学的かつ事例に基づいて実証的に検証することで、1980年代に音を扱う芸術をめぐってある種の亀裂が生じたことを明らかにした。こちら更なる検証が必要だが、1980年代の音響文化の特質の一つを発見し、今後の研究の基盤となること、これが本研究の学術的意義かつ社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The objectives of this research project are: A. to clarify the overview of sound art in Taiwan; B. to accumulate case studies on sound art in Japan and to describe the overview; C. to conduct individual case studies on sound art in Europe and the United States; and D. to integrate these research results and to find an inter-Asian perspective. However, due to the impact of the global COVID-19 pandemic, A and C, which required overseas research, did not progress much. On the other hand, B made intensive progress in research, and based on the accumulation so far, it was possible to promote D. Especially, the publication of the single-authored book 'What is Sound Art?' has become the foundation for further case studies and international comparative and comprehensive research in the future.

研究分野：サウンド・アート

キーワード：サウンド・アート　音響文化論　聴覚文化論　現代音楽　現代アート

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とするサウンド・アートと呼ばれる芸術は 1950 年代以降に出現した。その多くは音楽と美術が交錯する領域に位置し、音響を用いる造形美術、造形的な意匠で構想された音響芸術、空間と環境を主題とする視聴覚芸術、新しいタイプの音響芸術など、音楽と美術が交錯する多様な表現形態で発表されてきた。確立したディシプリンを持つ現代美術や現代音楽といった領域とは異なり、サウンド・アートは、ジャンル横断型で多様な表現形態を持ち個別事例も様々な領域に拡散しているため、厳密で網羅的な調査研究は困難だった。欧米の事例を中心とするサウンド・アート研究は 90 年代に始まり、2010 年代後半までにはそれなりの成果を上げている。対して、アジア圏の事例に注目する先行研究はまだほとんどなく、日本では中川眞『サウンドアートのトポス』（昭和堂、2007）や 2010 年代以降の申請者による研究論文など数えるほどしかなく、また、アジアの他の国でもほとんどなされていない。

しかし、これはチャンスでもある。今こそ、アジア圏におけるサウンド・アート研究を蓄積し、欧米圏とは異なる間アジア的なパースペクティヴを見出し、アジア圏の事例を中心とするサウンド・アート研究の基盤を確立すべきである。そのような構想のもと、本研究は開始された。

２．研究の目的

本研究の目的は、東アジアの事例に基づきサウンド・アートに総合的にアプローチすることだった。具体的には以下の研究を行うという計画を立てた。

A：台湾におけるサウンド・アート研究：事例研究の蓄積
B：日本におけるサウンド・アート研究：事例研究の蓄積と通史的研究
C：欧米におけるサウンド・アート研究：A, B との比較を念頭に置いた事例研究
D：A, B, C の総合：台湾の事例と日本の事例の比較考察、並びに、その比較考察を欧米におけるサウンド・アート研究のなかに位置づけることを通じたアジア圏の事例を中心とするサウンド・アート研究の基盤の確立

である。この研究の独自性は、A.台湾におけるサウンド・アートの概要を解明すること（先行研究はない）、B.日本におけるサウンド・アートに関する事例研究を蓄積すること、また、その概要を記述すること（先行研究は少ない）、C.欧米におけるサウンド・アートに関する個別事例研究を行うこと（充実した先行研究を利用しつつ独自事例を研究する）、そして何より、D.これらの研究成果を総合して間アジア的パースペクティヴを見出すこと（先行研究はない）、だった。日本を含めた東アジアにおけるサウンド・アートの事例研究を蓄積すること、また、その研究成果を、英語圏の充実した先行研究の中で位置付けし直すこと、これが本研究の学術的独自性及び創造性として設定された。

３．研究の方法

A，B，C，D それぞれ、申請者がこれまで展開してきた研究を継承発展させる予定で構想された。

A（台湾におけるサウンド・アート調査）のために、インタビュー調査に基づく事例研究を継続する予定であった。
B（日本におけるサウンド・アート調査）のために、雑誌調査、アーカイヴ調査、インタビュー調査に基づく事例研究と歴史的研究を継続する予定であった。
C（欧米におけるサウンド・アート調査）のために、近年の研究成果を十分吸収したうえで、アーカイヴ調査を行う予定であった。
D（A ,B,C の総合）のために、以上の研究成果に基づき、A と B の比較考察を行い、また、「A と B の比較考察」と C の比較考察を行う。その成果を総合し、英語論文を国際的な査読誌に発表する予定であった。

しかし、世界的なコロナ禍のために、A と C の調査を十分に進めることができず、代わりに、B を重点的に深めるとともに、これまでの事例調査や研究蓄積に基づき、D の研究成果に代わるものとして、欧米日のサウンド・アート研究の比較考察を組み込んだ単著『サウンド・アートとは何か』を刊行することになった。

４．研究成果

研究計画の初年度よりコロナ禍のために海外調査出張が不可能となった。それゆえ、当初の研究計画からは海外調査が不足した研究プロジェクトとなったが、当初より本研究プロジェクトを構成する個々の研究計画は十分にモジュール化してあったので、3 年間に達成すべき十分な質と量の研究成果を得ることができたと考えている。

2020 年度にはアーカイブ調査に基づく研究を重点的に推進し、また、これまでの調査成果から得られたデータを整理研究することに注力した。結果的に、日本のサウンド・アートに関する事例調査についてはその概要を記述する論文を英文で発表し、台湾におけるサウンド・アート研究については研究論文をひとつ発表し、欧米におけるサウンド・アートに関する個別事例研究に関する研究発表を行った。
2021 年度は、前年度に引き続き、B.日本におけるサウントド・アートに関する事例研究とその概要の整理に注力し、さらには、D.欧米日と東アジアにおけるサウンド・アートの比較総合研究の準備を行った。結果的に、前年度の英語論文の成果を継 承発展させて、日本のサウンド・アートの概要を記述する日本で最初の論文を発表し、日本で行われた 2 つの展覧会に関わること――「サウンド&アート」展の学術監修と論考執筆、「クリスチャン・マークレー」展の展覧会図録への寄稿――で、欧米におけるサウンド・アートが日本という文脈の中でどのように機能するかを密接に観察できた。
2022 年度 は、前年度に引き続き、B.日本におけるサウンド・アートに関する事例研究とその概要の整理に注力し、さらには、D.欧米日と東アジアにおけるサウンド・アー トの比較総合研究の準備を行った。 結果的に 2022 年度は、日本におけるサウンド・アートの歴史に大きな即席を残す「京都国際現代音楽フォーラム(1989-1996)」に関する事例研究を発表し、ま た、近年世界的に再評価が著しく、日本におけるサウンド・アートの歴史との接点も重要な「1980 年代の日本における Kankyo Ongaku」について、国際学会で発表し、英語論文を作成した。
2023 年度には、これまでできなかった海外渡航が可能なったため、C.欧米におけるサウンド・アートに関する事例研究を進めることができた。これにより、日本 の事例と欧米の事例とを比較考察する事例研究を進捗させることができた。また、国際学会で日本の音響彫刻の歴史研究と、英語圏での Sound Sculpture 研究と の比較を試みる発表を行なった。 また、本年度も B.日本におけるサウンド・アートに関する事例研究を進め、90 年代神戸ジーベックにおける活動について実証的調査を取りまとめた。90 年代神戸ジーベックについては今後も継続調査を実施する予定である。 さらに、本年度は、私のサウンド・アート研究の現時点での集大成である単著を刊行することもできた。こちらは今後、D.欧米日と東アジアにおけるサウンド・ アートの比較総合研究の基盤となるはずである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 中川克志	４．巻 10
２．論文標題 日本におけるサウンド・アートの系譜学 ： 京都国際現代音楽フォーラム(1989-1996)をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Cross sections ： 京都国立近代美術館研究論集	６．最初と最後の頁 48-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中川 克志	４．巻 1
２．論文標題 クリスチャン・マークレー再論：世界との交歓	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京都現代美術館（編）　2022　『クリスチャン・マークレー：トランスレーティング[翻訳する]』	６．最初と最後の頁 182-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中川 克志	４．巻 9
２．論文標題 ＜研究論文＞Case Study on the Process of the Popularization of Kanky? Ongaku: How Brian Eno’s ambient music has become known in 1980s Japan?	５．発行年 2023年
３．雑誌名 常盤台人間文化論叢	６．最初と最後の頁 75～91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00015178	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川 克志	４．巻 8
２．論文標題 ＜研究論文＞サウンド・スカルプチュア試論―歴史的展開の素描と仮説の提言―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 常盤台人間文化論叢	６．最初と最後の頁 73～99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00014430	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中川 克志	4．巻 1
2．論文標題 日本における〈音のある芸術の歴史〉を目指して――1950-90年代の雑誌『美術手帖』を中心に――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 細川周平（編）『音と耳から考える：歴史・身体・テクノロジー』（アルテスパブリッシング）	6．最初と最後の頁 484-497
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川 克志	4．巻 1
2．論文標題 創作楽器という問題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 廣川暁生、明石薫（編） 2021 『サウンド＆アート展 見る音楽、聴く形』 「サウンド＆アート」展図録（アーツ千代田3331、2021年11月5日-21日） 東京：クリエイティヴ・アート実行委員会2021	6．最初と最後の頁 34-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川 克志	4．巻 1
2．論文標題 クリスチャン・マークレー再論：世界との交歓	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東京都現代美術館（編） 2022 『クリスチャン・マークレー：トランスレーティング[翻訳する]』（東京都現代美術館、2021年11月20日-2022年2月23日） 展覧会図録 東京：左右社	6．最初と最後の頁 182-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nakagawa Katsushi	4．巻 1
2．論文標題 History of Sound in the Arts in Japan Between the 1960s and 1990s	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Damien, and Francois Mouillot. 2021. Fractured Scenes: Underground Music-Making in Hong Kong and East Asia. Springer Singapore	6．最初と最後の頁 225～239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-981-15-5913-6_16	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川 克志	4．巻 7
2．論文標題 台湾におけるサウンド・アート研究試論――ワン・フーレイ（王福瑞、WANG Fujui）の場合――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 常盤台人間文化論叢	6．最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18880/00013695	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 NAKAGAWA Katsushi
2．発表標題 Kankyo Ongaku: How Brian Eno's ambient music has become known in 1980s Japan?
3．学会等名 International Association for the Study of Popular Music（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 中川克志
2．発表標題 「Sound/Art」展（1984）のパースペクティヴ――〈サウンド・アートとは何か〉とは何か――
3．学会等名 第71回美学会全国大会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 中川克志	4．発行年 2023年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 286
3．書名 サウンド・アートとは何か 音と耳に関わる現代アートの四つの系譜	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関